



No. 186

ティーブレイク

## Tea Break

寂寥荒野の向こう側に

会員 正林 真之

「最近、もの忘れが激しくなった」。40を超えた頃からそんな声が仲間内から聞こえるようになってくる。そして、50を過ぎると、そんなことはもはや当たり前であるかのように、それが挨拶代わり程度の会話となったりするものである。

ところが本当は、記憶力というのは、年齢とともにそう変わるものではないらしい。これに関して言うと、例えば“最近”という言葉について、小学生の“最近”というのは「だいたい2~3日くらい」を意味するのに対し、大人のそれは「だいたい半年~1年くらい」を意味するという。そうすると、「最近会った人の名前を思い出すことができない」というのも、対象とする範囲が長いのだから、ほぼ間違いなく、忘れる数は多くなってしまふ。これが実は、「最近、物忘れがひどくなった」のカラクリの一つだということである。

このような原因が分かったとしても、それでもやはり、物忘れが酷くなった実感があるのであるが、それはいささか仕方のないことであり、実は、「人生に慣れてしまって、色々なものに対して興味を持つ意欲を失ってしまったところの部分で、記憶力が低下しているように見える」ということはあるようである。

ちなみに、「もの忘れ」ということに関して言えば、脳科学者の黒川伊保子先生いわく、固有名詞を忘れるうちは、まだ良いほうだということである。聞いたところによると、80歳を過ぎて暫くすると、今度は、普通名詞のほうを忘れるようになるということである。それは例えば、ある有名な女優が居たとして、その人の名前を忘れるのはまだマシなほうで、「女優」という言葉自体を忘れるようになってしまうというのである。そしてまた、この「女優」という言葉自体を忘れてしまうと、そ

の「女優というもの」の存在意義すら、全く感じなくなってしまふというのである。

これは実は、人工知能の開発でも、言語の中でも普通名詞というのはその存在意義とともにデータ化されているというので、まさに人工知能と同じように、普通の人間の脳もプログラミングされていることになる。

そしてまた、我々は弁理士というのは、ある意味では固有名詞を仕事にしているようなものである。普通名称だけのものというのは、特許の対象でも、商標の対象でもない。今更あえてここで言うまでもなく、一般化された技術どうしの組み合わせで固有の技術となったものだけが特許の対象であり、一般化された技術そのものは「従来技術」あるいは「一般的な技術的事項」ということで、特許されることはない。商標のほうも、その普通名称か、それとも固有名詞か、で商標登録することができるかどうか変わってくるし、そのあたりの感覚も含めたセンスが必要とされるのが、手続き業務の奥底にある弁理士の商標実務である。

なので、もし弁理士が普通名称ないしは普通名詞を忘れるようになってしまったら、特許のほうでは固有技術を理解するための土台が無くなってしまい、商標のほうでは固有名詞と区別するための境界が分からなくなり、そもそも商売にならなくなってしまふ。

ところで、以前のティーブレイクにも書いたが、私の母のほうは、義母も含めて全て若くして急死であるのに対して、私の父のほうは、長生きの代償として、息子である私のことが、もう分からなくなってきている。確かに老人ボケというのは、それはそれで困ったものなのであるが、先の黒川先生いわく、これも脳に予めプログラミングされている大事な機能だということである。そ

う、「お別れが辛くならないように」ということで、色々なものをきれいさっぱり忘れさせてくれる。要は、この世に憂いを残さずに安らかに死ぬようにするための準備をするための機能なわけである。

よくよく考えてみれば、今の息子や娘と分かれて急死してしまったとしたら、それこそ別れが寂しくて、本当につらい思いをするに違いない。それこそ、「幽霊にもなれるなら、是非ともそうなりたい」と、そう思うことだろう。そんなことを考えれば、その思い出の全てを忘れ去ってから死ねたほうが、どんなに幸せなことだろう。だから、死の準備段階として脳はこれらをきれいさっぱりと忘れさせてくれるということなのである。

このような脳の機能の下で、人間というものは、記憶

した順序を逆戻りして、記憶を失くしていくようである。そうして、生まれたその瞬間の最初の記憶である母の手のぬくもり、その手に全てを委ねた記憶だけを残して死んでいくものらしい。それがまさに“大往生”というものらしいが、自分は父にとって何番目の記憶であったのかと思う。そして、それを遡れば、来るべき“その日”が計算できることにもなるだろうが、「もの忘れ」というのは悪いだけのものではないらしい。

けれども、そうやって考えを巡らすたびに、いつも思うのが、父とは違って早死にしてしまった母たちのことである。せめてせめて、ほんの少しだけでもよいから、ボケるだけの時間を与えてあげたかったと、しみじみとそう思うのである。